

《研究ノート》

J. A. Comenius: Opera Didactica
Omnia. (1657) の新版、その他に
522—1

鈴木秀勇

一六四〇年の頃、五〇歳をまたずに、「イングランド、フランス、オランダ、ドイツ、ポーランド、ルーマニアなど、全教養ヨーロッパに、單に一個の教育者としてのみでなく、大學者のひとりとして、また全科學の改革者として、その名をたたえられた」ヤン・アモス・コーメンスキ（Jan Amos Komensky, lat. Comenius, 1592—1670）が、かつて、『憂愁の人。祖國と教會との・痛ましき破滅に注ぐ・一キリスト者の・悲しみと憂いとに心沈む嘆き』（これについては本稿後節）を、また『大教授學』の前身であるボヘミア語『教授學』（次號論説）や、『開かれた・言語の扉』（本節後出）を捧げて、その救済を願った祖國ボヘミアも、前世紀末ないし今世紀初めに至るまでは、彼の遺産の繼承に、ほとんど關心を拂わなかった、といつてよい。たとえば、『大教授學（Didactica Magna）』は、フラン

ケ、ルウソフ、バゼドウ、ベスタロツツイ、フロエーベルなど近代教育の建設者たちの路線を豫示した、と評されるにもかかわらず（ヨーロッパの他國でも、この著作は、出版後二百年以上も埋れるにまかせられていたとはいへ）、一八七一年のドイツ語譯に始まり一九四一年のロシア語譯にいたる・再版、ほん譯のうち、一二種のドイツ語譯、二種のラテン語再版（いずれもドイツ人の手になりドイツ出版）、九種のロシア語譯、三種のポーランド語譯、それぞれ二種の・ルーマニア語およびイタリア語譯、について、ハンガリア（マジャール）語、スペイン語、フランス語、英語へのほん譯それぞれ一種の間に、ようやくボヘミア語譯一種（一九〇五年）が加わるにすぎない。同ように、『開かれた・言語の扉（Janua Linguarum Reserata.）』（一六三一年出版）は、ボヘミア國民のために制作されながら、たちまちのうちに全ヨーロッパの教育者に採用されて、一六三六年までの間に、アイルランド語版、スペイン語ラテン語版、スペイン語英語版、ドイツ語イタリア語を含む六カ國語版、イタリア語ラテン語版、ラテン語ドイツ語ギリシア語ヘブライ語版等々の刊行をみたにとどまらず、アラビア語、トルコ語、ペルシア語、モンゴル語にまでほん譯され、一躍著者にヨーロッパの指導的教育改革者の名聲を齎らしたのであるが、一七世紀の間に右のように再・改版された四五種中ブラハで出版されたものは、わずかに二種、その後は一八八〇年のボヘミア語版一種にすぎない。さらにボヘミア語『教授學』にいたっては、その草稿がポーランドのレシエノ（Leszno）で、カ

「イチャル (Jos. Kacer) により一八四一年に発見されたもの」出版検閲官により、コームンスキーが亡命者であった、という理由で、公刊を禁止され、一八四九年に初めて「ボヘミア王國博物館」(現「國民博物館」)の刊行物に發表されたほどである(6)。爾後一八七一年から一九三一年までの間に九種の再版に恵まれたが(7)。また『教授學全著作集』(Opera Didactica Omnia. [ODO]. Pars I—IV, Amsterdam, 1657 [—58])⁽⁸⁾にしても、いかに原刊本の發刊部数が六〇〇部の少数であったとはいえ、ボヘミア本國に所藏されてゐるものは、七部(プラハ大學圖書館に二部、プラハ國民博物館圖書館、ヤン・フス館圖書館、フマニエロフ (Přerov) 若きコームンスキーは最初にこの町の聖職者兼教師であった)圖書館、プラハのロームンスキー名稱福音派神學部 (Komenského Bohoslovecká Evangelická Fakulta) 圖書館、ハンガリアン・ブロードにあるコームンスキー博物館、にそれぞれ一部⁽⁹⁾のみである。このよ
うな状態は、コームンスキーの生涯が、宗教的迫害、三十年戦争の戦火、生涯の大半の國外流浪という波瀾に充ちていたためと、ボヘミア語『教授學』草稿の發表の経緯にうかがわれるように、その後の・祖國の歴史がたどつた政治的・宗教的・文化的諸關係の結果といわなければならぬ。

この沈滞は、今世紀にはいつてから一たんは『コームンスキー總著作集』(後出第四節)刊行の企畫によつて破られたものの、その計畫も再び挫折し、ようやく一九五七年、前述ODOの出版三百年を機に、コームンスキー記念事業の一環として

ODOの寫眞寫本版が新たに刊行されるに至つて初めて、彼の遺産の全面的繼承の仕事は本格的軌道に乗り始めた。

- (1) Jan Kvačala: Johann Amos Comenius. Sein Leben und seine Schriften. Lpz. 1892. S. 247.
- (2) Will S. Monroe: Comenius, and the Beginning of Educational Reform. N. Y. 1900. Ch. IX.
- (3) Bohumil Novák: J. A. Komenského život, dílo a doba. (ノヴァーク編『J. A. コームンスキーの生涯・著作・時代』) Praha, 1957. str. 64—68. ノヴァークの右編著にこの節は、後節。
- (4) 'Novissima Linguarum Methodus' Cap. VIII, § 20. (Opera Didactica Omnia.—II. col. 81—82.)
- (5) 'N. L. M.' Cap. xxvii, § 5. (ODO—II, col. 268.)
- (6) Novák. str. 45—52. (7) Novák. str. 41.
- (8) 草稿は、ノールキン (J. E. Purkyn) の盡力で一八五一年に國民博物館に納められた (Novák)。發表は、『ボヘミア博物館發行古本・手稿叢書』(Staročeská Biblioteka vydávaná nákladem Českého Museum) 第三四卷、編者はトーマク (W. W. Tomek) 序文はイチャル (Jos. Chmela) の著。
- (9) Novák. str. 40—42. (9) ODO (1957) 第三卷『註解』ボヘミア語序文、str. 14. (11) 同右ラテン語序文 p. 29.
- (12) ノボフススキーは、一九二〇年の Weisler Berg の

(75) 研究ノート

戦いは、全ボヘミア國民の肉體と魂とを萎えさせその力を奪った」といふ行文で、ボヘミア言語・文學史の最終期「第六期。ボヘミア語は「衰滅に陥る」の敘述を始めてい」(Josef Dobrovský: Geschichte der böhmischen Sprache und Literatur. [Praha, 1792.] Halle, 1955. S. 113)

II

ODO寫眞新版は、チェコスロヴァキア科學アカデミエ總裁ハループ(Otkar Čihup)を代表刊行者とし、同アカデミエの歴史部門と言語學部門との協同事業である(Academia Scientiarum Bohemoslovenica. Sectio historica cooperante sectione philologia. Johannes Amos Comenius OPERA DIDACTICA OMNIA. Editio anni 1657 lucis ope expressa. Tomus I, Pars I-II. Tomus II, Pars III-IV. Tomus III, Commentationes...Pragae...MCMLVII.)。出版部数は、二五〇〇部。

右に見る通り、一六五七年の原刊本では四部に分たれていたものが、今度の新版では、原刊本第一第一部を第一巻に、第三第四部を第二巻に、それぞれ合本し、第三巻『註解』で、刊行者の解説・校訂・諸版照合が行われている。各巻の判は32×20cm、脊皮、薄灰綠色布地裝幀である。第一巻は全四九一ページ(第一部二四七ページ、第二部二四四ページ)、第二巻は全六五九ページ(第三部五九二ページ、第四部六七七ページ)

であり、いずれも、所收の著作の序文にあたる部分を除き、一ページ二欄組みで、各欄に欄數字がうたれている。第三巻は一五〇ページ。

第一巻の巻頭に、ボヘミア語、ラテン語、ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語(の順)で、それぞれ一ページの・刊行の辭ともいふべき文章が付されている。——一六五七年コーメンスキーは、亡命の身を寄せたアムステルダム市に、教育學の著作集をODOの名のもとに、捧げた。ODOは、若き世代の・より良い教育によって人類の状態を改善する目的のもとに展開された努力の成果である。コーメンスキーは、亡命のうちにも、その祖國を想い、苦難と悲慘とから自國民を解放する途を思っていた。三百年後社會主義國家としての祖國は、彼の企圖に相通する學校體系を實現するに至った。一九五六年三月二八日、五月三〇日、チェコスロヴァキア共和國政府は、ボヘミア・スラヴ國民とコーメンスキーの遺言との關係を表彰するため、一九五六年—五八年のコーメンスキー記念祭典のための・重要な文化的措置に坎する決定を承認し、チェコスロヴァキア科學アカデミエにたいし、ODOの記念版刊行と、完全な・コーメンスキーの著作刊行(一九五七年—七〇年を豫定)、および教師と一般國民とのためにコーメンスキーの・教育學關係基本著作の刊行(一九六〇年を豫定)を、負託した。この決定にしたがい、科學アカデミエは、本刊本の第一、第二巻に、一六五七年アムステルダム刊本の寫眞寫本を公刊する。第三巻は、ODOの成立と構成とに坎する研究と、本刊本所

收の各著作の・先行諸版本との照合とが含まれる——。

このようにして、われわれは、従来稀く、本に属していた ODO を、原形のままで観、かつ研究する機会に浴することに なった。

第一部には、'Didactica Magna' はじめ、'Janua Linguarum Reserata', 'J. L. R. Vestibulum' (『開かれた・言語の扉』)、『Pansophiae Praehudium' (『汎知學序幕』)、『Co-natum Pansophicorum Dilucidatio' (『汎知學の意圖の解明』) など八著作が、第二部には、'Novissima Linguarum Methodus' (『言語の・最新の方法』) など六著作が、第三部に は、'Schola Pansophica' (『汎知學の學校』)、『Schola Ladus' (『演劇に於ける學校』) はじめ大小二八著作が、第四部に は、'Vita Gyrrus' (『流轉の生涯』)、『Ventilabrum Sapientiae' (『知えの筈』) など一〇著作が、含まれてゐる。

なお、この寫眞版の底本となつた原刊本がどれであるのかは、『註解』序文にも告げられていないが、東獨のコーメンスキー研究者ホーフマンによると、前節に示した「ヤン・フス館圖書館」の所蔵本である。

- (一) Frantz Hofmann による ODO 新版への評言のうち。
 » Archiv pro bádání o životě a díle Jana Amose Komenského. *Acta Comeniana*. (『J. A. コーメンスキーの生涯と著作とにかんする研究のための紀要』) Číslo XV-III. [1959.] I. str. 85.

三

ODO の第三卷『註解』は、その「序文」の部分(5—30 ページ)と、所收の著作の多くについてその成立史をしるし、全著作の誤植を訂正し、先行諸版のあるものについてはその主要版本との照合を施し異同を記録した部分(31—145 ページ)とからなる。

「序文」としては、ボヘミア語とラテン語とで書かれた・ほぼ同論旨の・二つの序文が付されている(ボヘミア語序文は、1—16 ページ、ラテン語序文は、16—30 ページ。兩者の相違はただ、ラテン語序文の冒頭二パラグラフに—コメニユウスの ODO を形づくる諸著作は、ヨーロッパ諸國民の文化遺産と不可分であり、コメニユウスはその遺産を新しくまた良く整理して教育と教養とに仕える學問蓄積とした。コメニユウスの作品は、ガリレイの諸對話、デカルトのエッセ、ヴィコの新科學とともに、人間と世界との中に新しい理性を導入した—旨が書かれてゐること、および、序文末尾に近く、ODO 原刊本の所蔵の部数がしるされてゐることに、すぎない)。

序文は、パートチュカ (Jan Patocka) 擔當の「ODO の成立と構成とについで」(ボ 5—13、ラ 17—16)と、ブラムボラ (Josef Bramborra) 擔當の「ODO の異版についで」(ボ 14—16、ラ 27—29)、『および「結語」(ボ 16、ラ 29—30)の三敘述から成る。

パートチュカによれば、一六五六年の・ポーランド・スウェ

ーデン間の戦火により、当時レシュノにいたコーメンスキの財産も、主として汎知學關係の貴重な手稿も、烏有に歸した。このような事態の再發を防ぐため、コーメンスキは、自らの作品を一括して印刷することを考え、かつまたそれによってボヘミア兄弟會 (Jednota bratrská) の監督としてヨーロッパ各地に分散し困窮に苦しむ兄弟會聖職者への資金をえようとしたところに、ODO 成立の機縁がある。ここからコーメンスキは、かつて (一六四四—四七年頃) スウェーデン宰相オクセンステルナ (A. Oxenstierna) の委嘱により『言語の・最新の方法』を制作したさい、その斡旋にあたったルドヴィク・デ・ヘール (Ludovic de Geer) 在オランダのフランス系商人。『方法』は、これに捧げられた(の親族の援助を期待し、かつまた、この年彼の七部作『人事の改善にかんする總勸告 (De rerum humanarum emendatione Consultatio Catholica)』(これについては、本稿後節) の出版を引受けた・オランダの有名な出版業者エルゼヴィエ (Elzevier) をたのみとして、ドイツ經由アムステルダムにおもむいた(ボ5—6)。

しかしコーメンスキは、自己の著作の編集にあたり、單なる収集におわることなく、自らがへてきた人生行路と思考の遍歴とを、オランダの讀者につたえる必要を感じた。そこに、『流轉の生涯』に始まり、自己の作品について自ら評言を下す『知えの箕』など一〇編から成る・ODO 第四部が付される理由がある。であり、パートチュカが、第四部所收の諸著作と先行諸作品との関連に言及する意味がある(ボ8—13)(この内容につ

いては、本稿では紹介を省略する)。

「序文」の中で示唆深いのは、パートチュカが、ODO 第一部から第三部の編集・構成にあたってコーメンスキがとった方法について、述べている見解であろう。

汎知學關係の諸作品は、焼失した手稿をできる限り復元してここに収めたといえ、教授學關係の諸著作に比して、編數も少く、自然、構成は後者に大きな比重がかかることになる。その上、汎知學關係の諸論作は、それが人間知の體系的統一を意圖して制作された性質上、おのずから相互に編集上の統一性を保證することになる。「教授學關係の作品は、これに反し、きわめて異質的な諸部分から成り立つままに、統一的に編集されなければならないかった」。しかし、それはいかにして可能であるのか。パートチュカは、「それは、自らの思考と作品との生成を提示する傳記的枠によって生じた(Stalo se to biografským rámcem, vykládajícím vznik vlastních myšlenek a knih)」。傳記の枠についての、また自らの魂の・苦惱に充ちた努力の歴史についての・この特徴的な思考は、著作の整序にさいし一六五七年の・ある時期に、コーメンスキの中に生じたものに相違ない(ボ7)、と述べている。

ODO の第一部から第三部に至る全作品は、ただ制作年代を追って配列されているのではない。第一部は「一六四二年までのレシュノ時代」、第二部は「一六五〇年までのエルビング時代」、第三部は「一六五七年までの(「シャロシュ」)バタクにおける・ハンガリア時代」(そして第四部は「オランダ時代」と

いうように、四つの時期的統合が配慮されている。しかもこの時期的統合とは、單にほぼ同時期に成立した諸作品をまとめてみた、という意味ではない。コーメンスキーは、各部の冒頭に、簡潔ではあるが、その部に收められた諸論作が制作されるに至った契機、自己の思考の動向を、自傳風に語る一文章を、それぞれ付けている。いかえれば、彼は、この自傳を付すことによって、自らの諸思考の生成の道程を示し、この道程の中に教授關係の作品も汎知學關係のそれをもすべて位置づけることによって、全著作にある統一を與えようと工夫したのではあるまいか。パートチュカが上に「傳記の枠」とよんでいる方法は、右をいうのであり、こうして初めてわれわれは、コーメンスキーが、ODOの總表題を、『これまで種々の機會に執筆され、また様々の地で刊行され、今やしかし、ただに「成立」時期の同一をえるように収集されるにとどまらず、窮極の意圖としては一つの體系に整然と構成されるように整序された教授學全著作』と稱している意味を知るのである。ホーフマンが、「なかなか、J・パートチュカの功績は、ODOが、雑多な部分を年代的に配列したコングロメラートであるのではなく、全體的なものをえようと努める・常にコメンスキーに特有な苦心……がそこに働いていることを、立證したところにある」、「求められている・教育學的なるもの統一と完結性が、一面では、『自己の思考と作品とを提示する傳記的枠によって』えられた、とする「パートチュカの」敘述は、適切である」と書いているのは、上述の點を指しているのである。

パートチュカの見解で示唆的な・第二の點は、コーメンスキーが、とくに第四部の制作にあたり、自己の・先行諸作品に「歴史的距離 (distance historická)」をとった、としている解釋である。パートチュカは繰返し書いている、「著者 (コーメンスキー) は、自己の著作を、完結した結實として (jako hotový výsledek) ではなく、發展の中にあるものとして、(v jeho vývoji)、「讀者に」提示しようと欲した。しかしその發展とは、最後の段階が常に、まさしく最も完全な・最も成功した段階でなくてはならぬ、とする評價を下す底のものではないのである」(ボ7、8)。

たしかに上に見た通り、コーメンスキーは、自己の思考とその所産とを歴史的生成の中に示すような構成を、ODOに與えようとした。しかしながら、彼は、先行する著作よりは後期の作品にこそ、自己の・より本來的な・より高い思考が現われる、とはしていない。たとえば、一六三〇年代の『大教授學』を貫ぬく・自然への《類比》の方法(ないし自然的方法)にたいして、一六四〇年代の『言語の・最新の方法』での『分析』の方法こそが、自己の決定的方法である、というような評價はとらない。コーメンスキーが、後者によって前者を斥けるのではなく、この・二つの方法にひとしく、豊饒性を認めていることは、第四部所収の『知えの箕』に餘りに明らかである(この點については、本論叢、次「三月」號、『ロメニウスにおける Methodus syncretica と Methodus analytica』—V・イェリネクの見解への疑問』をご覽いただきたい)。パートチュカ

は、ここに、「人間の現實を、その過去から、その生成から理解して、それ〔現實〕を、完結した・純粹な成果や、一束の處方箋に還元することを欲しない・歴史家およびフィロログとしての・驚嘆すべき能力」を觀ているのであるが(ボフ)、このように、自己の思考生産の成果のいずれをも、自己にとつて窮極的なもの最後のものとは承認せず、常にそれらに歴史的距離をとる態度を、われわれはコメンスキの自己提示の仕方として注目しなければならない。

次に、プラムボラ執筆の「ODOの異版について」では、本刊本四部の各々について、その本文欄數字の誤記、重複、飛躍などが指摘されており、このことと、在ボヘミアの原刊本についてもその間に印刷技術上の相違が見られるところとから、異版の存在が推定され、世界のODO原刊本所藏者にたいし、所藏本についての報告方の協力が希望されている。

最後に「結語」によれば、この新版の刊行を擔當し校訂にあつたのは、科學アカデミー會員で、同アカデミーのコメンスキ名稱教育學研究所、あるいは哲學研究所の所員である・上記プラムボラ、チェルヴェンカ(Jaromír Červenka)、『シムネーフスカアー女史』(V. J. Miškovská)、『上記バートチュカ、チャブコフヴァーヴォートル・ボヴァー女史』(Dagmar Čapková-Votrubová)、『および、同アカデミーのギリシア語・ローマン語・ラテン語研究部のクルッーチェカ(M. Klučka)の諸氏である。

(1) 一六五六年五月二日、フィゲルあての・コメンスキ

キーの書簡には、手稿喪失の悲嘆とそのリストがしるされ
 258 (J. Kráča: Korrespondence J. A. K. (Spisy J. A. K. V. 5.) Praha 1902. str. 206.)

(2) ODOのタイトル・ページには、「ラウレンチュス・デ・ヘールの出費により」と印刷されている。

(3) しかし實際の出版者は、クリストファー・クンラートであった。

(4) ODO-I. Dedicatoria; Patocka, str. 6.

(5) »Archiv pro bádání, etc. & str. 86.

四

一八九七年、クヴァチャラ(Jan Kváčala)やパテラ(A. Patera)らの手で、「科學・文藝・技術のための・フランティシエク・ヨセフ皇帝の・ボヘミア・アカデミー」から刊行された『ヤン・アモス・コメンスキ著作集』(Spisy Jana Amosa Komenského)も、往復書簡集の出版にとどまらなかつたらしく、また、一九一一年から「レーベル(Josef Reber)、『ノヴァーク(Jan V. Novák)』を編集者として、「モラヴィア教員連盟中央協會」によって刊行を開始された・ボヘミア語作品をも含む『コメンスキ總著作集』(Všecké Spisy Jana Amosa Komenského. Nákladem Ustřední Spolka Jednot Učitel-ských na Moravě. Brno)』も、一九二六年までに計畫の四分の一(八卷)を公刊したのみで、出版を中止された。前述ODOの刊行の辭は、ラテン語・ボヘミア語總著作の収集出版(一九七

〇年までに)と、同時に教師と一般國民とのために基本著作の出版を約束していたが、一昨一九五八年、チャプコウヴァー|| ヴォートルーボヴァー女史ら、科學アカデミエ・コトメンスキー名稱教育學研究所その他のスタッフの編集にかかり、「國立教育學出版所 (Státní Pedagogické Nakladatelství) から刊行された『ヤン・マクス・コトメンスキー選集。第一卷 (Vybrané Spisy Jana Amose Komenského. Svazek I. 450 str. S. P. N. 1958.)』は、この企畫にいらなるものである。

この『選集。第一卷』所收の著作は、現代語で編集された『ボヘミア王國における學校改革に關する・簡短な提案 (Návržení krátké o obnově škol v Království Českém.)』(str. 29—40)、『大教授學』のボヘミア語譯 (‘Velká didaktika’) (str. 41—282)、『ボヘミア語の『母親の〔幼兒〕學校の教示 (Informatorium školy mateřské.)』(str. 283—346)、『ボヘミア語の『開かれた・言語の扉 (Brána jazyků otevřená.)』(str. 347—430)』であり、これに、文獻的注解、コトメンスキーが用いた・モラヴィア語の語い、が付されている。

『提案』は、ボヘミア語『教授學』制作の直後に執筆されたものである。後年プールのキンがやはりレシニョでその草稿を發見し、一八五一年ブラハの博物館に寄贈し、『古ボヘミア叢書』に發表された以後、再刊を見なかった。『母親の學校の教示』は、一六三三年にレシニョでドイツ語版 (J. A. C.): ‘Informatorium der Mutter Schul.’) とポーランド語版とが、一六五三年にラテン語版 (これが、後に ODO—) 中に

‘Schola Infantiae’ として收められる) が出たが、これのボヘミア語草稿 (本『選集』に再刷) は、一八五六年にギンデルリ (Anton Gindely) によってやはりレシニョで發見され、同五八年にブラハで印刷された。ボヘミア語『開かれた・言語の扉』は、教授學に關する著作としては、コトメンスキーが生前母國語で公刊した・ゆい一作品であって (一六三三年、レシニョで) これもラテン語版が先に出た (一六三一年)。本『選集』にはラテン語版序文をも譯して、收めている。

この第一卷所收の・これら三作品は、コトメンスキーの・初期の教育學思想と教授學思想とを知る上に、きわめて貴重なものであるけれども、ただ『提案』を收録しながら、ボヘミア語『教授學』(これについては次號論說) を收めなかったのは、『大教授學』との比較照合ということが専攻研究者の仕事に屬すからというのであろうか。

本『選集』には、ハループが刊行の辭 (str. 5—7) を書き、バートチエカが、本卷所收の諸作品をめぐって『第一卷序文』を執筆している (str. 9—27)。ここで一つだけふれておけば、われわれは、コトメンスキーにとって教育は、人類の救済にたいする斷念と絶望と、しかしまた、それへの憧憬と確信という、相矛盾した・二つの想念と心情との緊張の中にかもし出された心的エネルギーの發出口であった、と考え、しかしこのエネルギーは、——救済の望みが斷たれているのは、人類一般においてではなく、實は成人の世代においてであり、これに反して、若い世代の中には、このような危機からは自由な・そして墮落

の以前における・人類の生命が、潜在的に息づいている——という思考プロセスを経て發出した、とみるのであるが、バートチユカもまた、『大教授學』に到達するまでにコーメンスキーが、地上否定的な心情にとらえられたことを、認めている。すなわち、バートチユカによれば、ボヘミア反亂の悲劇的結果、反宗教改革の進行、戦亂、等々の情況にたいして生れた『地上の迷宮と魂の樂園 (Labyrinth světa a Justhaus srdce.)』(本稿後節)は、地上における・人間の誤謬に絶望し、この迷宮を脱出する途として、自己の魂の中にとじこもり、そこに平安の深淵を見いだそうとする・慰めの書であり、コーメンスキーが早くから抱いていた・調和に充ちた壯麗な世界秩序の認識としての汎知學の意圖は、ここに挫折する。しかしながら、いかなる機縁によるかはつまびらかでないが、この地上否定から脱却しつつあるコーメンスキーを、あたかもその回心の瞬間におびとらえたのが、エリア・ボヂヌスの『教授學』であった。ここに、地上の迷路を克服する道は、今や地上の否定によってではなく、「地上それ自身の内部での行爲によって (Křinností vesvrátě samém)」⁽¹⁾いしかえれば、「いまだ迷宮にのみ込まれてもおらず、迷宮によって破滅せしめられてもおらぬ存在、すなわち、可塑的な・けがれなき児童、に向けられた・實踐的な・組織された・周到な行爲〔教育〕によって (Křinností praktickou, organizovanou, promyšlenou, obrácenou k těm bytostem, jež dosud nejsou labyrintem pohlceny a zkaženy, obrácenou k dětem, plastickým a čistým.)」可能になると

確信されたのだ、とバートチユカは理解している。

五

チユコスロヴァキア・ユネスコ協力委員會が、ODO 原刊三百年記念に出版した『コーメンスキー・著作拔萃 (Jan Amos Komenský, 1592—1670, výbor z díla Československá komise pro spolupráci s Unesco. Praha, 1958. 194 str.)』⁽²⁾『地上の迷宮と魂の樂園』から七章、『大教授學』から三章、『人事の改善にかんする總勸告』の第四部『汎教育 (‘Vševychova [Pampaedia.]’)』から五章、第六部『汎改革 (‘Všena-prava [Panorthosia.]’)』から四章を、収めている。

七部作の『總勸告』については本稿後節で述べることとし、本節では、右にその第一一四、一〇、一九—二〇章のみが抜萃されているにすぎない『迷宮』について、ふれてみたい。一六二三年執筆の・この書は、著者とひとしく祖國を追われた兄弟會聖職者たちが、クラーリッツェ (Kralice) のボヘミア語譯聖書 (一五九三年成立) と共にその身に帯びた・ゆ一の所持物であつたことに照して、兄弟會の社會意識や宗教的心情をうかがう上に重要な手掛りを含むばかりでなく、前節にしろしたように若き日の著者のメンタリテイを知る材料ともなり、かつまた文藝史上最もすぐれた寓意物語の一つと評されるにも拘らず、論及される機會に餘り恵まれなかつた。

この作品は全五四章から成り、地上の迷宮を描くのは、第一章—第三章、魂の樂園を示すが、第三章以下である。そ

の第一部は、善惡の別をわきまえる年齢に達した私〔「コーメンスキ」が、人々の身分・階級・職業・労働・意圖の多岐を見て、平安と平和と悦樂との生活をえるには、まず地上の・あらゆる事物を觀、しかるのち慎重にそれらを比較して初めて、人生行路を選ばなければならぬ、と決心して現世の巡歷に出た見聞と感懷とをしるすものである。

迷宮を象徴するのは、眞の闇の中にそこだけが明るい・城壁に圍まれた大きな都である。この都は、東に生命の門をもち、そこから西に走る・六筋の街は、家族、商人、學者、聖職者、爲政者、戰士、の身分・階級・職業を表わして、西の・分裂の門に通じ、西方の岩壁の上にそびえるのは、Art. Fortuna (富貴の塔) すなわち、地上の女王である・虚榮の知えの宮殿、富者と權力者が快樂と榮光とにあずかる場所である。

私は、まず都の廣場で、ほとんどすべての人間が、あるいは豚の唇、あるいは犬の齒、さては牛の角、驢馬の耳、蛇の眼、狐の尾、狼の爪、孔雀の頸、たげり逆立つ鳥冠、馬の蹄をはやし、一様に猿に似ている醜怪を見るばかりでない。《死》の手に自らが渡す矢にあたり、喉をつまらせ足をちぢめて息絶えて行く者、そのまわりに集り喰らい飲み騒ぐ人々の群、しかも死者の落ちて行くところは「おそるべき闇と暗がり。その闇にうごめくのは、蛆虫、蛙、蛇、蠍。漂うは、ものの腐り惡臭、肉體と魂とを襲う・硫黃と瀝青の匂い。なべてたとえようもない恐怖以外のなものでもない」のを目撃する(第七章)。私はまた、第四の街・キリスト教聖職者の身分について、福音

の教師と自稱する者たちが、前にペテロの鍵を下げながら、後にユダの財布を握るのを見て、「彼らを聖職者(duchovní)と呼ぶのは誤りである。まことは錢職者(duchovní)と呼ぶべきだ」と悟り、彼らが、靈を聖書によって養うと唱えながら魂に欺きを行い、口に敬虔を説きながら眼に淫慾をたたえ、僧帽と白衣の上に甲冑をまといっているのを知る(第一八章)。さらに私は、第五の・國王や君主を含む爲政者身分について、彼らが出生や選舉によってえたと稱する・その地位も、實は、金錢で購われ懇願によって入手され追従や恣意によって獲得されたことを學び、彼らの・ある者には、臣下の不平を聞くに耳なく、ある者には、眼前の無秩序を見るに眼なく、正しき者にたいする・悪人の陰謀を嗅ぎつけるに鼻なく、口もきけぬまでに虐げられた人々のために語るに舌なく、正義に基く掟を遂行するに手がなない畸形を、發見する(第一九章)。しかし私はやがて、富者と權力者が、高くそびえる富者の塔上に身をおくゆえにかえって顛落の危機にさらされていることを、見る。―權勢ある者の王座は、下界の人々から仰ぎ見られようために、塔の端にあつた。だからそれは不安定で僅か一押されれば容易にくつがえつた。今まで王座の上で威を張っていた(don)者が、次ぎの瞬間にはさかしまに(don)墜落して行った。王座は、高ければ高いほど、倒れ易かつた。私はひややかに觀する、富貴(Fortuna)を與えるのも、顛落を齎らすのも、ひとしく運命(Fortuna)の仕業である、と(第二六章)。

私が地上の無殘を思い知らされる・最大の機縁の一つは、戦

士の境遇である。彼らは常時には、豚とえらばず、酔って泥土にまろび、桶から食り食らい、神にはじす神をおそれず、醜行の限りを盡す。この・第六の街の地下室には、人を刺す道具、ぶち切る道具、切り離し、穴をあけ、切り刻み、突き通し、切り落し、引き裂き、焙る、等々の道具が、幾千臺の馬車でも運び切れぬほどに積み上げてある。「これは、どんな野獣を殺す用意なのだ?…人間をだど?…人間が人間を殺すために (Hide na Iidi) このような・おそろしい物を考えつくとは、神よ、なんとという狂気なのだ!」と叫ぶ私も、君は少々氣難し屋だな、と嘲笑を買うにすぎない。突然軍鼓が鳴り角笛が響く。戦士たちは馳せ集い、劍を握りしめ、野獣よりもむごたらしく容赦なく斬り合い、血しぶきが飛ぶ。四方に起る叫喚、馬蹄の響き、甲冑がぶちあたり劍がかみ合う音、砲火の轟音、銃・砲弾の・耳朶をかすめる音、角笛の響き、軍鼓のとどろき、叱咤する者の喚き、勝誇る者の喚き、傷つき死んで行く者の喚き。すさまじい・鉛の霰、おそろしい閃光と雷音、つきつきに人間の手、首、足が宙に飛び、續々と戦士は倒れ、すべては血の海に泳ぐ。思わず私は叫んでいた、「ああ、萬能なる神よ、一

體どうなるのです? 地上は滅びるほかないのですか? (Ach, všemohoucí Bože, což se toto děje? zahynouti-liž má ten svět?) (第二〇章)

第一部の末尾で私に「なんとという・無残な・悲惨な・不幸な人類であろう。地上はもはや救い難い。わが希望はすべて絶え果てた。わが上に呪われ」と死を願わせる(第三章) コーメンスキーのペンシズムは、明らかに三十年戦争が露呈した・右のような・人間の破滅の目撃に發する以外のものではない。

(本稿本節つづく)

本稿、および次號の『ロメニエウスにおける Methodus syntitica と Methodus analytica。—V・イェリネクの見解への疑問』執筆にあたり、(筆者のそれが到着するまで) ODO¹ の他の・貴重な資料を、ご藏書中から拜借することをお許し下さいました梅根 悟先生、『選集』その他の拜借をご快諾下さいました國民教育研究所、その折にご高配を賜りました上原専祿先生に、心からお禮を申述べます。

(一橋大學助教授)